



ポ

オ

リジリア アッシャー家の崩壊 ウィリアム  
・ウィルソン 群集の人 モルグ街の殺人事  
件 赤死病の仮面 陥穽と振子 黒猫 天邪  
鬼 アモンティラドの樽 ユリイカ 詩

ボオドレール

悪の華 パリの憂鬱 火箭・赤裸の心  
アシーシュの詩 ファンファルロ 書簡

中野好夫 鈴木信太郎 他訳

世界文學大系

33

筑摩書房版

世界文学大系 33

---

ポ オ  
ポオドレール



---

昭和34年7月20日発行

定価 450 円

訳者代表 鈴木 信太郎

発行者 古田 晁

印刷者 山元 正宜

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8  
・振替東京 165768 電話(29)局7651

---

目次

ポ  
オ

リジイア	阿部知二訳	5
アツシャー家の崩壊	松村達雄訳	15
ウイリアム・ウイルソン	中野好夫訳	29
群集の人	中野好夫訳	42
モルグ街の殺人事件	中野好夫訳	48
赤死病の仮面	松村達雄訳	71
陥穽と振子	小川和夫訳	76
黒猫	松村達雄訳	85
天邪鬼	中野好夫訳	92
アモンテイラドの樽	吉田健一訳	97
ユリイカ	小牧野信一訳	101
詩	日夏耿之介訳	163
『マルジナリア』より	吉田健一訳	

ボオドレール

悪の華

パリの憂鬱

火箭・赤裸の心

アシーシュの詩

ファンファルロ

書簡

『ユリイカ』をめぐって

ボオドレールの位置

解説  
ボオ

ボオドレール

年譜

鈴木信太郎訳

秋山晴夫訳

阿部良雄訳

渡辺三郎訳

松室三郎訳

佐藤正彰訳

吉田健一訳

ウヰアレリイ

ウヰアレリイ

佐藤正彰訳

吉田健一

鈴木信太郎

177

266

311

344

372

389

428

436

445

449

452

装幀  
庫田 登

ホ

才

# The Bells.

By Edgar A. Poe.

1.

Hear the sldges with the bells —  
Silver bells!

What a world of merriment their melody foretell.

How they tinkle, tinkle, tinkle,  
In the icy air of night!

While the stars that oversprinkle  
All the Heavens, seem to twinkle

With a crystalline delight;

Keeping time, time, time,  
In a sort of Runic rhyme,

To the tintinnabulation that so musically well:

From the bells, bells, bells, bells, ~~bells~~

Bells, bells bells —

From the jingling and the tinkling of the bells.

さてここに永劫不滅の意志なるものがある。なにびとが、その生気に満てる意志の神秘を測り知ろうか。おもえば、神とはその強烈の性によって万象に滲み渡る意志力の謂である。人もその繊弱い意志の甲斐なきにやらぬかぎり、天使にも將た死にも、屈従し終るものではない。

ジエウゼフ・グランヴィル

いかにして、いつの時、また正しくはいはずこの地で、リジイアという女性と知りあうようになったか、私は、心の奥底をまさぐるともおもい出すことはできない。もはや永い歲月は流れ去り、はてしない懊悩は私の記憶を弱めてしまっている。いや、いま私がそれらのことを精しく心に呼び戻すことができぬというのは、あの恋人の性情、まれなほどの学識、あやしくも静かに澄んだ麗容、低い楽音のような言葉が心を慄かせ魅する響きなどが、私の心のうちにしずしずとひそやかに忍び入ってきたのであって、いかにして何時どこで、などと気づくひまもなかつたからであらう。しかし、初めのころしげしげと逢ったのは、ライン河畔のある古い朽

ちかけた都市であつたとは憶えている。彼女の家系、——それはたしかに口ずから聴いたことがある。かぎりなく古い家柄であつたとは疑う由もない。リジイア！ リジイア！ 私は外部世界の印象を掻き消すになよりもふさわしい性質の学問に沈潜しながらも、この美しい言葉——リジイアという言葉によつてのみ、眼のまに、いまは亡い彼女の面影を幻のように立ちのぼらせる。それにしても今これを書きながら、はたと気づいたことは、あのわが女友たち、わが許嫁、やがてわが学問の伴、わが心の妻、になつた彼女の、父方の姓をついぞ知らずに過したということである。私にその穿鑿心を起させなかつたのは、あのリジイアの悪戯な要求からであつたか、それとも私の愛情の強さを試すためであつたか。それとも私の心の気紛れから、——もつとも熱烈な愛恋の聖殿にささげる狂おしくも浪漫的な献げ物としてであつたか。私はただおぼろ氣にそのような事実ばかりを想いおこすのだが、——それをおもえば、私がこのことの端緒や経緯をまったく忘れはてたとしても何の不思議があらう。そしてもし、あのロマン、スと呼ばれた精霊、——偶像を拜むエジプトの、蒼靄めて霧のような翼をもつ女神アシトフエツトが、人もつたえるように不吉の婚姻を司るものとすれば、たしかに私はそれに司られていたのである。

しかし、けつして心に忘れられぬ切な想い出がひとつある。それはリジイアの容姿である。

身の丈は高くやや繊細く、近くまへのころは瘦せおとろえてさえた。挙止の壮麗さと静謐なやすらかさ、その足取りのいいようもない軽やかな弾み、それを描こうとつとめても甲斐ないわざだ。彼女は影のように近づき、影のように立ち去つた。締め切つた書齋に私が籠っていたときなど、その大理石のような手を私の肩に置きながら、低く美しい声の音楽をひびかすまでは、いつ入ってきたとも気づくことはなかつた。容顔のうるわしさといへば、彼女に比べうる乙女はない。それは阿片の夢の光耀であつた、——デロスの娘たちの、まどろむ魂のうえにはたたく幻影よりも、はるかに怪しい神変にみちた、とらえがたくも心を高めゆく面影であつた。しかし、その容姿は、われわれが古代の異教徒の美術において謬つて教えこまれて崇拜するところの、あの規格的な美ではない。ヴェルラム卿、ペイコンは、美のあらゆる形式と種目とについて正しくもいっている。「その均衡に何らかの奇異を持たぬかぎり、絶妙の美とは在り得ないのである」と。たしかに、私はリジイアの容姿が古典の均整と異つたものであることを見、そのうるわしさはまさに「絶妙」であると知り、その全面に「奇異」が漂っていると感したのであるが、——しかも、どのように焦慮して、その均整の破綻を探し出し、「奇異」の認識を私の心に納得させようとしても、それはできなかったのである。蒼白く秀でた額の輪郭をまさぐつてもみた、——それは完璧であつた、——



このようにも神々しい壮麗をあらわすには、完璧という言葉もただ冷やかな響きしか持たぬ。至純な象牙をも欺く皮膚の白さ、頰のうえのあたりの威にみちたひろがり、鳥の羽根のようにだらかな高まり、それから、烏の羽根のように黒く房々とゆたかに溢れ、おのずから捲いて波打つ髪は、ホオマアの「ヒヤシンスに似る」という言葉をまったく力強くも表出している。私は織美な鼻の線をみる、——ヘプライの優雅な銘牌のほかのどこにも、これに似た絶品をみたことはない。同じように豊満な滑らかさに包まれ、同じように眼にはみえぬほどに驚の嘴のようじまがり、同じように諧和にみちた鼻孔の褶曲は、自由不羈の精神の力を語っている。私は美しい口元をながめる。ああ、ここにはあらゆる天上的なものの凱歌がある、——薄い上唇は莊重に弾ねあがり、——下唇はやわらかに放縱にまどろみ、——えくぼはたわむれ、色は呼びかけ、眩しいほどにきらめく歯は、彼女がおだやかに静かに、そして心を躍らすばかり輝かしく微笑むとき、その上にこぼれかかる淨らかな光を、一すじものこさずに照り映えさせる。私は顎のかたちをしらべる、——ここにもまた、ギリシヤのものにみる、優雅な広まり、物優しさと威厳、円満と靈智とがある、——それはアテナの子クレオメニーズの夢にのみアポロ神が啓示した線条である。それから、私はリジイアの大きな眼に見入る。

ものを知らぬ。あるいは、ヴェルラム卿がいう秘密は、私の恋人の眼にこそあったのかもしれない。それはこの人類にありふれた眼よりはるかに大きかったと思う。ヌーアジアヘッドの溪に住む民族の羚羊に似たもつともつぶらな眼よりつぶらだった。しかもこのリジイアの特徴がやや明らかに眼立つのは、たまさか、はげしく心を昂ぶらせる時のことではない。そしてそのたまゆらの彼女の美は、——私の燃えたつ空想の眼に映るところでは、地上より高きもの、地上のものならぬもの美であり、神秘的トルコの天女の美であった。瞳の色は輝きみちた黒である。そのはるかうえに、長々とびた黒曜石の色の睫毛がかかる。かすかに乱れた線をつくっている眉毛もその色である。しかし、私とその眼に見出した「奇異」の感は、その容貌に見る形、色合い、かがよい、などとは別個の性質のものであって、どうしてもそれは「表情」の中にこそあるのだというほかない。ああ意味の無い言葉よ。ただの音響でしかないその広茫の底に、われわれは靈的なものへのかぎりない無知を埋めているのだ。リジイアの眼の表情！ほんとうにながいあいだ、私はそれを考えてみたのであった。真夏の夜もすがら、それを測り知ろうと思ひ悩んでもみた。あのデモクリトスの井戸よりも深くわが恋人の瞳孔のうちに潜むもの、——それはなにものであるのか。ああ、何ものか。私はそれを知らうとして物狂おしくすらなつた。この眼！この大きな、輝き満ち

た、神聖な瞳！それは私にとってレダの双子宮の星となり、私はそれに狂熱を捧げる占星師になつた。

心理学上の多くの不可解な異常事のうちでも、もつとも激しく心をかき乱すものは、——學術の府でも心づかぬことと思われるのだが、——われわれが、長く忘れ果てたことを想い出そうともがくとき、いまひと息で想い出せるというところまで来ながらも、ついに想い出し得ぬというところである。それに似て、私がリジイアの眼の探求に熱したとき、たびたびその表情の完全な認識に近づいたと感じながら、——いまひと息と感じながら、——しかも完全には掴み得ず、やがてはまったく取り逃がしてしまふのであった。しかも、不可思議にも、じつに神変不可思議にも！宇宙に多くありふれた事物の中にも、私はあの表情に似たものの一群を見出したのである。というのはこうだ。リジイアの美が私の魂を刺しつらぬいて、その中に聖殿のように座を占めてからこのかた、その大きく光る瞳が心のうちに掻きおこす情緒に似たものを、多くの物質世界の存在物から感じたのである。しかし、それにもかかわらず、その情緒をよりよく定義することも、分析することも、いや疑視することすらもできなかった。くりかえしていえば、私はすくすくと伸びてゆく葡萄の蔓にその情緒を感じた、——あるいは蛾を、蝶を、蛹を、あるいは走りおちて行く水を見つめるときに。大洋にも、——また隕星の落下にも、感

じた。並みはずれて老いた人々の眼眸にも感じた。それから空の一つ二つの星を望遠鏡で眺めているとその情感に打たれたこともある。(とくにひとつ、琴座の巨星の近くの、対になって変光する六等星がそれである。)また、絃楽器のある音調によって、あるいはしばしば、書物のある言葉によって、その情緒にみだされることがあった。他にも数えきれぬほどの場合があるが、ことに私がよく想い出すのは、ジエウゼフ・グランヴィルの著書のある個処である。それは、(おそらくはその奇矯さからであろうかも知れぬが)いつも私の心にあの情緒を掻き立てるのであった。「さて、ここに不滅永劫の意志なるものがある。なにびとが、その生氣に満てる意志の神秘を測り知ろうか。おもえば、神とはその強烈の性によって万象に滲み渡る意志力の謂である。人もその纖弱い意志の甲斐なきによりぬかぎりは、天使にも將た死にも、屈從し終るものではない」

長い歳月を経ておもしろい耽るうちに、この英国倫理家の言葉とリジイアの性格の一部分とのあいだに、微かながら一脈の繋りがあることを私は探り得た。思想、行動、言語の熾烈さは、おそらく彼女のあの巨大な意志力の結果、またはその指標であつたらう。長く交わるあいだにも、彼女の意志は、そのほかの明白な証跡によつては、その存在を知らせなかつた。私が今までに知り得たあらゆる女性のうちで、この外貌の静かな、いつも波ひとつ立たぬ水面のようなリジ

イアこそ、食欲の禿鷹のような酷烈な情熱に、もっともはげしく翻弄されつくしていたのである。そしてこのような激情について私が測定し得たのは、ただ、私を歎ばせもし怖じさせもした奇蹟的なほどに大きくみひらく眼によつてか——またはその低声の、魔法的な旋律、抑揚、明澄性、静謐さによつてか、——または、彼女がつねに口にした狂おしい言葉の(その発声の様態との対照によつて二重の効力をおさめながら)恐るべき精氣によつてかであつた。

リジイアの学識については前にもいつた。それは女性には見られぬほどに博大なものだつた。古典語に深く熟達していた。近代ヨーロッパの諸方言についても、私の知識で判じられるかぎりでは、彼女がまちがつたことを知らない。ただひとえに深遠であることのためにもっとも尊重されるところのアカデミーの誇りの学問の問題についても、リジイアがまちがつたことなどはなかつた。わが妻の資質の中のこの一点が、おくれればせの今となつてようやく、私の心を打ちのめし、何とあやしい力をもつておののかせることか。彼女の知識は女にはみられぬものだ、といったが、——男にしても、精神科学、自然科学、数学のあらゆる広汎な領域を、あのようにもみごとに渉猟しえたものが、どこにいるだらうか。リジイアの学力が該博で驚くべきものだつたということに、そのころは今ほどに気づかなかつたのだ。とはいへそのころすでに、彼女のほうがかぎりなく勝れていたことを深く感

じた私は、小児のように信頼して彼女にすべてゆだねて、結婚の初めのころに、もっとも熱中していた形而上学探求の混沌の世界を、彼女が導くままにしたのであつた。世に求められることと少なく、世に知られることはさらに少ない学問のことで、彼女が私の上に身を寄せかけてささやいてくれたとき、いかばかり大きな凱歌、いかばかりはげしい歓喜、いかばかり至純な希望とともに、私は感じたことだらう——わが眼の前にうるわしい前途が徐々に拡がってゆき、その長く壮大な、かつて人が踏み入つたこともない途を進めば、私もやがては、あまりに神々しく貴いがゆえに禁断されたところの、叡知の窮極に至るであろうということを。

それだけに、数年の後に、この私の無謀とも思えぬ希望が、翼をつけて飛び去るのを見たとき、私の悲嘆のいたましさはどれほどであつたらう。リジイアと離れては、闇のなかに手探りする小児のようなものでしかなかつた。彼女がそこにいて読んでいるということ、それだけで、われわれが没頭していた超驗哲学の秘奥の数々が明るみに浮き出てくるのであつた。彼女の眼の眩しい光を浴びなくなると、なごやかな金色の文字も、暗鬱な鉛よりも重苦しくなつた。そうして、やがて私が読みふける書物のうえに、あの眼の光がそそがれることは、ますますまれになつていった。リジイアは病んだ。狂おしい眼は、あまりにも燦々と燃えはじめ、白い指は墓地の屍蠟の色に透きとおる、秀でた額の碧

い静脈は、あるかないかの情緒の波にもはげしく膨らみまた沈んだ。死ぬにちがいない、と私は知った。私の心のうちでは、暗い天使との絶望的な争闘がはじまった。そして、熱情的な妻の争闘は、私のそれよりもはるかに強いものであったことが私の心を打った。その峻烈な性格をみていると、死すらも彼女を恐怖でとらえる力はあるまいとおもわれた。しかし、真実はそうでなかった。彼女が「暗影」と格闘した抵抗のはげしさを、正しく伝えようような言葉はない。暗澹たるありさまを見た私は、悲しみに胸も砕けた。なだめたくもあり、ことをわけて説きたくもあつた。——しかし、生命——ただひたすらに生命をのみ狂おしくもとめる彼女の熱望のはげしさを目のあたり見ては、慰めも理論もこのうえもなく愚かに見えた。しかも、いよいよこと切れるというときまでは、荒れ狂う彼女の魂は極端的に悶えながらも、そのうわべの身振りの静けさはなにひとつとして掻き乱されなかつたのである。声音はいよいよやさしく——ひくくもなつたが——しかし、そのもの静かにつぶやく言葉の意味のはげしさについては、いまここで語りたくないほどである。生き物の声とも思われぬ音調に——生けるものがまだかつて知らなかつたようなその欲求と願望とに耳を傾けつつ魅入られたとき、——私の心はくるめいた。

私を愛してくれていたことはかねて疑うべくもなかつた。また、彼女のもののような胸の裡

には、愛情はなみなみならぬ力ですべてを支配していたとは、かねてたやすく思い当ることもできた。しかし、末期の際にのみ、その愛情の強さに私は心から打たれたのだ。いつまでも私の手を執つたままで、その心のありたけを吐露してくれたのであつたが、その情熱的な愛恋は、偶狂狂信に近いものであつた。このような打明けに恵まれるほどの価が私にあつたらうか。——さてまた、私も恋の懺悔をしようとしたおりしも愛人を奪われてゆくほど呪われる価が、私にあつたのであろうか。——このようなことを娓娓と書くには忍びない。ただこういへばいいのだ——それほどの価ありとも思えぬ、むだにささげられたともいえる愛に、女の殉情というもおろかなほどに、リジニアが身心をゆだねたときに、私もついには、いまこのようにも疾く消えてゆく生命を物狂おしく求めてやまぬ彼女の願望の核心を汲み取つたのである。この狂おしい願望——生命——ただ生命へと憧れる熱情、それを描く力は私にない。それを表わす力のある言葉を知らない。

深夜のころ彼女は死んでいった。その時、おごそかに私を傍に招いて、つい数日前に彼女自身で作つた詩句のいくつかを口誦めと命じた。私はそれにしたがつた。

つぎのような詩である——

見よ、ま寂しきこの歳月に  
またとなき今宵の楓葉！  
翼ある天使ら、被衣まといて

ふかふかと招いてうち集い、  
憧れと怖れにみてる狂言を  
棧敷に入りて眺むれば、  
時しも管絃、高く低く  
奏ずるは、うるわしき天上の奏。

所作者ら、天つ神の装い兼ねて、  
声ひくく、くぐもりつぶやき  
おちこちに飛び交わせども、  
漠として巨いなる怪性のもの、  
心のままに、かれらを操り  
またここかしこ舞台をまわし  
禿鷹さながらの翼ふるいて  
見えざる悲愁の気をうち降らす。

あな、乱がわし、この狂言、  
されど心忘る日あらめや！  
玄妖の幻を、とこしえに追ひ、  
とこしえに捉ええぬともがら  
渦なして、駆けめぐりては  
またも初めに、戻りくるのみ。  
この狂言の、意は何ぞ、  
狂乱か、いな罪劫か、はた恐怖か。

さあれ見よ、道化めく騒ぎのものな、  
はらばい忍び寄るものを！  
寂寞の遠景より

真紅の血に染みてのたうち出でて、  
のたうち、のたうち、所作者らを啖えば、  
みな、こと切れぬ、断末魔の痛みに。  
天使ら、すすり泣きしぬ、  
現身の血糊にぬれし毒牙を見しとき。

ことごとく、灯は消えぬ、——消えぬ。  
さて、棺くわん覆おほなせる緞帳どんちやう、

おのけるものみなの上に  
嵐あらし搏つかつごと疾はやくおくりくれば、  
天使てんしら、みな蒼視そうしめはてて、  
被衣かひぎぬぎ、立ち上がりつつ、

認めぬ——こは悲劇「人間」なり、  
立役者こそ、征服者「虫」なり、と。

私がこの詩句を読み終ったとき、リジイアは立ちあがって、その腕を発作的に高く差しのべて叫んだ。「ああ神よ、高き父よ！——このようなことが、いささかもゆるぎないことであってよろしいのでございますか。この征服者は一度も打ち負かされることなくてよろしいのでございますか。私たちもまたあなたの血肉ではありませんか。誰が、生気にみちた意志の力の神秘を知っているものでありましょうか。人間は、そのかよわい意志のはかなさに押し流されぬかぎり、天使にも、また死にも、屈まがれし終るものではないでございせん」

それから、激情につかれはてたのもあろうか、その白い腕をぐったりと垂れて、憂うれいに沈みながら臨終の床に帰った。そして、その最後の息を引きとったとき、その息にまじって、唇からはある低いつぶやきの声こゑが流れた。私は身をかがめて耳を傾けたのだが、それはまたグラ  
ンヴィルの文章の結びの言葉であることを明ら

かにききとった。「人もその纖弱せんじやくい意志の甲斐なきにやらぬかぎり、天使にも、將た死にも、屈まがれし終るものではない」

リジイアは逝いつた。私は悲しみにこなごなに碎けてしまつて、もはやこのライン河のほとりの暗鬱あんうつな荒廢の都市に住むことの、荒廢たる寂寞じゃくもくにたえかねた。もともと私は世間でいう富といふほどのものには恵まれてはいなかつたのだが、リジイアは世の常の人々にめぐまれるよりははるかに莫大ぼくだいなものを遺していつたのである。それで、私は幾月かをあてもなくわびしい放浪ほうろうにすぎした末、「うるわしきイングラント」の、もつとも荒れはてた淋しい地方にゆき、その名はいわれないことにするが、ある僧院そうゐんを買かひ求めていくらかの修理をほどこした。暗鬱あんうつな鬼氣ききをたたえた豪壯な建築、ほとんど陰慘な風光を持つその領域、またそれらにまつわる数々の悽鬱きううつで蒼古な伝説、そうしたもののは、私をこの人の氣もない僻地に追いやつたところの絶望自棄ぜつぼうじきの感情に、このうえもなくふさわしいものであつた。さて植物に青々とまわれつつ崩れを見せているこの僧院の外郭には、もはや手を入れることをほとんどしなかつたが、私は子供じみた強情さと、おそらくは悲哀をまぎらそうとするはかない望みとから、その内部をば、世に許されぬほど豪華に飾り立てようと思ひ打ち込んだのであつた。こうした耽溺たんじやくには、子供のころすでに趣味があつたのだが、いま、愁嘆しゅうたんに昏迷こんみした心にそれがまた眼覚めてきたのであろう。

ああ、あの豪華で幻怪な緞帳、沈鬱なエジプト風の彫刻、奔放ほうぱうきわまる蛇腹へびはらや家具、黄金の総くわんごんに波立なみだつ絨氈じゆうたんのきちがい染みた文様、それらのうちに、もはや、狂乱の萌もしさえ見えはじめたのでないかと思われる。私は阿片あへんの枷かぎにしばられた奴隸ぬれいになつてしまひ、私の工作も指図も、夢幻の色に染められていたのであつた。しかし、そうした愚行について述べたてている暇はない。ただ、あのただ一つの部屋のことさえいえばよろしい。その永遠に呪のろむべき部屋に、私はわが花嫁として、——忘れぬリジイアのあとつぎとして、——トレメインの明髪碧瞳めいはつせきどうのロウイーナ・トレヴェニオン姫を、心の錯乱のほずみに、祭壇の式後にみちびき入れたのである。

その新婚の部屋の建てつけと飾りとがありさまのつ一つが、今もありありと私の眼の前にうかぶ。傲慢なトレヴェニオン一族が、黄金への餓うえにかられて、その鍾愛しゆあいの息女きよめがあのように飾られた部屋の闕あひらを踏み入ることをゆるしたとは、その誇りにみちた心をどこに打ちすてたというのか。その部屋の微細の部分までをこまかく記憶してはいるとはいつたが、——もつとも肝腎かんじんなことは、情なくも忘れていようである。じつさい、その部屋のほしいままの装いの中には、記憶をすっかりとどめさせるような何の秩序も統一もなかつたのである。部屋は、城の様式に建てられたこの僧院の、高い塔の部分にあつて、五角形をした非常に広いもの

であった。五角形の南に向った一角は、全面が一つの窓になっていて、——ヴェニス製の大きな玻璃が、一枚張りになってはめこまれており——鉛の色に染められていたから、日の光も、月の光も、それを透して落ちてくるときには、内部のものみなを不気味な色にぬらすのである。この大きな窓の上のほうには老いた葡萄の蔓が、網目になって絡みあいながら、厚い城壁の壁を這いのぼっていつている。色の燻った樅材の天井は並みはずれて高く穹窿形になっていて、半ばゴシック風、半ばドルーイッド風の、世にも怪異奔放な意匠の入念な浮彫りをほどこされていた。この陰鬱な円天井の中央の窪みからは、長い環を噛み合わせた一本の黄金の鎖が垂れ、巨大な黄金の香炉が吊り下げられており、それはサラセン風の意匠でもあったるか、無数の孔が穿たれていて、その孔からはたえまなくさまざまな色の焰が、蛇のようにいきいきと、練れのたうちながら噴き出している。

東方風の腰掛と金の燭台とが、あちこちにいくらか置かれてあった。それから寝台、——婚姻の寝台は——インド風のもので、低く、堅い黒檀で彫られ、幕蔽いのような天蓋の下にあって。部屋の隅々の奥には、黒花崗岩の石棺が立ってあったが、それはエジプトのルクソールの前面の、帝王たちの墳墓から運ばれてきたもので、蒼古な蓋には茫漠たる古の彫刻がいちめんにぎざまれている。しかし、この部屋の幻怪さの中心は、その緞帳にこそあった。恐ろしく高

い壁面、——桁外れに高く聳える壁面には、その頂点から床まで、深々と壁をつくりながら、重たげな厚い掛毛氈が垂れ下っている。その地質は、床の敷物や、腰掛と黒檀の寝床との蔽いや、寝床の天蓋の幕や、半ば窓を隠して華麗な渦を巻く窓掛け、などと同じものであった。つまりもつとも贅沢に黄金を織りこんだ布であった。その布のうえには漆黒の色地で縫いこまれた、直径一フットほどの奇異な絵模様と、ところきらわす、不規則に撒きちらされていた。しかしこれらの形は、ある一つの角度から眺めるときに、初めて真に幻怪の性質を示すのである。今ではありふれてはいるが、その由来は非常な太古に溯るところの工案によって、それらは視角にしたがって千変万化する。部屋の入口に立つものには、それはただ一様に奇怪な錯乱とみえるばかりであるが、進むにつれて、その様相は消えてゆく。そして一步は一步と部屋の中に進んで立場を変えるにつれて、取り巻いてくるものは、おそろしげな物の怪のはてしない行列となってくるのであるが、それは北方民族の迷信から生れたもの、または修道僧の罪深い仮睡に立ちあらわれるもの、というほかない。この幻妖な感覚は、人工の工夫によって、窓掛けのうしろから絶間なく流れこむ強風のために、一層にその効果をつよめられて、全体は腫脹不安の気をおおりに立てるのであった。

このような広間、——このような婚姻の寢処に——私はトレメインの姫とともに、ほとんど

何の胸さわぎも感ずることなく、新婚のはじめの一月の惑溺の時を過したのである。妻が私の氣質の狂暴な気むすずしさを怖れ、——私を忌み避け、——ほとんど私を愛してはくれなかったことを、私も気づかずにはいらなかったが、それもかえって私に満足の感情をすらあたえた。私は人間というよりはむしろ悪魔に近い憎悪の念で、妻を憎んだのである。私の想い出は、(かぎらない悔恨とともに)恋しいリジーアへ、——あのおこそかであやかな、いまは墓の下に眠る女へ、飛び帰っていった。あの純潔、叡知、気高く——そして精美な性情、あの熱情のあふれた殉教的な恋愛を、おもい浮べて、私は心狂わんばかりだった。いまとなってこそ、彼女がもっていたあらゆる情炎よりも大きく生き生きと、わが心は燃えさかった。そのころ、(常住阿片の枷にとらえられていたのであるが)その麻薬の夢の興奮のあまり、あるいは深夜の沈黙のうちに、あるいは真昼の谷間の蔭ふかいたころに、私はあらんかぎりに彼女の名に呼びかけたのであった。——あたかもこれほど狂おしい渴望、沈痛な熱情、逝いたものへの身を焼き尽すほどの憧憬の力によって、彼女が振りすてていった——ああ、はたして、こしえにであろうか、——この地上の生の道へと、ふたたび彼女を呼び戻すこともできるとでも思ったかのよう。

結婚ののちの二月目がはじまろうとするころ、ロウィーナはにわかに病いに襲われ、その回復

はなかなか眼にみえなかつた。熱に身を焼かれた彼女は夜も落ちつかなくなつた。その浅い、まどろみのうちに、この城楼の内にか外にか、物の音、物の動くけはいがしきりにするといふのであつたが、私はそれはただ彼女の心の乱れからおこるのか、それとも部屋のの幻怪な雰囲気からおこるのかに過ぎない、といいきかせた。まもなく彼女は回復しはじめ、やがて健康をとりもどした。と、おもつたのも束の間で、やがて二度目のもつと激しい病魔のために、また悩みの床に臥したのであるが、今度こそは、常から弱々しかつたその体は、まったく回復する望みもなくなつた。この二度目こそは憂わしい病状であり、とりわけ恐ろしい頻発性のものであつて、侍医たちの学識も療法もそれに対しては何の術も知らなかつた。明らかに、人間の力では抜き去ることはできぬほど根強く体をとらえてしまつた、その執拗な病状が進むにつれて、彼女の精神状態までがいらだち、些細な恐怖感にも乱れさわぐよになつたことにも、私は気づかずにはいられなかつた。また、彼女は、この前のときにいったこと、——ききとれぬほどの物の響きや、緞帳のなかのあやしげな物の動きのことを、前よりもしばしば、執拗なほどにくりかえしているのであつた。

九月の末のところとおもわれたある夜、いつもよりも言葉をつよめて、その恐ろしいことがらについて、私の注意を惹くのであつた。彼女は落ちつかぬまどろみから、いま眼醒めたところ

だつたが、私は、なかば危惧の心、なかば漠然たる怖れの心で、その憔悴した顔の表情のうごきを見守つていた。私は彼女の黒檀の寝台のわたわらの、インド風の腰掛にかけていた。彼女は身をなにかば起して、低くはあるがせきこんだ囁き声で、いましもあの響きをきいたという、——しかし私にはきこえなかつた。またいまでも物のけはいを見たという、——しかし私には見えなかつた。風は緞帳の背後にせわしげに吹きなだれていた。私は、そのほとんど耳にきこえぬ息づき、壁面の物の形のかすかな変幻は、いつもの風の煽りからの自然の結果にすぎぬのだ、と（打ちあけていえば、自分自身でもまったくは信じられないことを）説明しようとした。

しかし、彼女の顔のおもてを蔽う死者のように蒼白な色は、彼女を安堵させようとする私の努力は空しいものだ、ということを示していた。

彼女は氣を失いそうにみえたのだが、声のどくところには召使もいない。私はふと、侍医がすすめて取り寄せていた弱い葡萄酒の罎ののありかをおもい出したので、部屋を横切つて取りにいそいだ。しかし、香炉の真下まで歩いてきたとき、一種異様なことがらが、二つばかり私の注意を惹いた、眼にはみえぬが手に触れることができるような何物かが、かるやかに私のかたわらを通り抜けたことを感じ、金色の絨氈のうへの、香炉から降り注ぐ煌々たる光の真ただなかに、影が、——かすかな、あやめもわかぬ、天使のようなものの影、——幻のその影、とで

もいわばいべきものが坐っているのを見た。しかし私は過量の阿片の酔いに心が昂ぶり乱れていたで、それらのものをほとんど気にもかけず、ロウイーナに話すこともしなかつた。葡萄酒がみつかる、また部屋にもどり、盃をにのみなみと注いで、息も絶え絶えのその唇に押しつけた。しかし彼女はその時いくらか氣を取り戻して、盃を自分の手に執つたので、私は身近かの腰掛に身を埋めながら、彼女の体を眼も放たずに見つめていた。そのときであつた、私ははつきりと、絨氈のうへ寝台の近くに、軽い足音がしてくるのに気づいたが、それから一瞬のち、ロウイーナがまさに盃を唇につけようとしているとき、燦爛たる紅玉の色をした大粒の雫が三つ四つ、あたかも部屋に罩めた虚空のなかの眼に見えぬ噴泉から降つてきたかのようになつた。その盃の中に滴り落ちるのを私は見た、——いや夢うつつに見たようにおもわれた。私はそれを見たのだとしても、——ロウイーナは見なかつたのだ。彼女はためらう色もなく飲み乾したが、私は口を嚙んでそのことをいわなかつた。これは、彼女の恐怖と、阿片と、この真夜中の時とのために、病的に燃え昇ぶつた幻想のさせたわざにすぎぬ、と思つたからだ。

それにしても真紅の雫が滴つたとおもうと、またたくうちに、妻の容態がにわか悪化してきたのは、あざむくべくもなく私には感じられたのだ。そうして、それから三日目の夜には、召使たちは墓に送るための死体の片づけをした

のであり、四日目の夜には、私はただひとり、彼女を花嫁として迎えたその幻怪な部屋のかなかに、経帷子きんゐしにつつまれたそのひとに向つて坐っていたのである。阿片によつてかもし出された、あらゆる幻想が、影のように眼の前を飛び交つた。落ちつきをうしなつた私の眼は、部屋の隅の石棺や緞帳の変幻する模様や頭上の香炉に身悶えする色さまざまの焰のうえをさまよつた。そのとき、私は過ぎたあの夜のことをおもひ出し、眼は、香炉の眩耀くらうの下、あるとき微かな影の流れを見た一点にと注がれた。しかし、そこには影はなかった。救われたような心地で吐息した私は、寝台のうえの蒼褪めて硬直した女体のほうへと眼をうつした。と、そのとき、私の心を襲つたのは、数知れぬリジニアの想いであった。——とおもうひまもなく、浪立つ奔流のようにはげしい勢いで、彼女をこれと同じような経帷子に包んだときの尽しがたい哀傷のことごとくが、私の心に押しよせてきた。夜はふけた。いつまでも、ただひとり、このうえもなく愛した者への痛ましい想ひ出に胸は溢れながら、私はロウィーナの死屍を眺めつくしていた。

おそらくは真夜中の刻であつたらうが、私は時間に気を配つてもいなくなつたから、あるいはその少しあとかさきかであつたかも知れない。低声の、ものやわらかな、しかし非常にはつきりしたすすり泣きの音が私の想ひを掻き乱した。それは、黒檀の寝台、——死の寝台から流れて

くると、私に感じられた。理を越えた畏怖にふるえて、耳をかたむけた、——二度とその音はくりかえされなかつた。私は眼をみはつて、死屍の動きの何一つ見逃がすまいとした——なんの微動も眼には映らなかつた。しかし、あれが心の迷ひであつたとは思われぬ。たしかに、いかにも微かではあつたが、その音をきき、私の内奥の魂はそれに応えて眼醒めたのだ。私は断乎として忍耐強く、屍体に注意を集中した。かなり時刻がたつても、この神秘に光明を投げようなことは起らなかつた。しかしついに、かすかな、非常に弱々しい、ほとんど眼にもとまらぬほどの色彩が、頬と、眼瞼まぶたに沈んだ繊い血管とのあたりに、燃えあがつてきたのが見えたと。人間の言葉では十分にいいあらわす力もないような、さまざまの恐慌と畏怖との感情の渦巻きのうちに、私の心臓は鼓動を止め、手足はその場に硬直してしまつた。しかし義務の念が私をうごかして、ついに正気をとりもどした。埋葬の準備は早まつた業であり、ロウィーナはまだ生きてゐるのだ、ということは疑うべくもなかつた。即刻にそれぞれの手当てをしなければならぬ。だが、この城楼はこの僧院の石使の居室からは遠くかけ離れていて、——声を立ててとどくところに人もいない——かなりのあいだこの部屋を空にするのであれば、彼らの救いを求めて呼びつける手段はないのであり——それを為し得る勇氣は、私にはない。私はただひとりで、まだ立ち迷つてゐる靈魂を呼びもど

そうと、さまざまに骨折りもがいた。しかしまもなく、ふたたび解体が起つてきたことはたしかだつた。眼瞼からも頬からも色は消えうせて、後にのこつたのは、大理石にもました蒼白であつた。唇は二重に皺を刻んで、物凄死の表情に縮みあがつた。体全体に、いとわしい湿りと冷たさとがみるみるひろがり、死に伴う硬直がまもなくすべてを領した。私は、さきほど驚愕して立ちあがつた腰掛に、慄えながらもまた崩れかかり、またリジニアの幻影を、醒めながらはげしくかき抱かかぐことに身をうちまかした。こうして一時間もたつたとき、(有りうることであろうか)また私は、死屍のほとりから流れてくる溼とした物音をきいた。恐怖に押しつめられながらも、私は耳を傾ける。また物音がする——溜息だ。屍体に駆けよつて私は見た、——ありありと見た、——唇にただよう震えを。しかし一分間ののちには、その唇は、真珠のように輝く歯並みをほころばせたまま、またゆるんでしまつた。このときまで私の胸のうちには、ただ底知れぬ恐怖しかなかったのだが、いまは驚愕の情が入りまじつてきた。眼はおぼろにかすみ、理性は迷つてくるのを感じた私が、こうしてふたたび義務がさしまねく仕事に打ちかかろうと、氣力を取り戻すまでには、なかなかのことではなかつた。今度は、額にも頬にも咽喉にも、いくらかの色が燃えている。全身には暖かみさえ行きわたつてゐるのが感じられる。心臓には弱々しくはあるが鼓動さえある。姫は生

きでいた。私はこのうえなく熱心に、蘇生の手当てにかかっていた。顛顛と両手をを擦り濡らし、經驗とわずかばかりの医学上の知識とで思いあたるかぎりの努力をした。しかし無駄であつた。急に色は消え去り、鼓動はとまり唇は死の表情に立ちかえり、一瞬間ののちには、全身は氷のような冷たさ、鉛の肌色、強烈な硬直、落ち窪んだ線条、その他、幾日も墓に埋められたものに見られるあらゆる厭わしい特徴を取り戻してしまつた。

また私はリジイアの幻影のうちに身を沈める——と、また、(いま書きながら私も私が戦慄すること、何の不思議もあるうか) 黒檀の寝台のほとりから、低いすすり泣きの音が忍びよる。しかし、何のために、あの夜の言いがたい恐怖のかがずかすを、いま私は描こうというのか。灰色の暁が迫るころまで、いくたびもいくたびもこの凄惨な蘇生の悲劇がくりかえされたこと、恐ろしい崩壊のたびに、ますます望みもなくみえる敵しい死へと落ち込んでいったこと、そのたびごとの苦悶は何か眼に見えぬ仇敵と格闘するかのようでありさまであつたこと、そしてその闘いの後ごとに、私にはわけもわからないのではあつたが、屍体の相貌がはげしい変化を見せていったこと、——何のためにそのようなことを長々と物語ろうというのか。ただ結末に急ぐことにしよう。

恐ろしい夜が、ほとんど明けようとしたとき、死の底にいた女は、また身をうごかした——た

びを重ねて、もはやせつたいに望みはないと見た。酷い壊滅の底から起きあがったのであり、しかも、いままででないほど力強くうごいてきた。私はといえは、もう前ほどから、努力することも身を動かすこともやめてしまつて、棒のようになつて腰掛に身をすくめ、はげしい感情の旋風にすべもなく身をまかせていたのだが、そのさまざまの激情のうち、極度の恐怖感は、かならずしも私を戦慄させ焼き尽しはしなかつた。くりかえしていうが、屍体は今までになく生き生きと動き出したのだ。顔には、はじめに見るほどに強く生命の色が輝きあふれ、手足はしなやかになつた。眼瞼がまだ重たげに閉じ、埋葬のため巻きつけた装束の類が、まだこれは屍体であるということを示しているのを除けば、ロウィーナは、まったく死の桎梏を振り捨てたのだと思ひ做すこともできるのであつた。そう考へることは、そこまですなつてもまだ附に落ち兼ねたとしても、この経帷子に包まれた姿が、寝台から立ちあがって、弱々しい足取りでゆるめき、眼瞼を閉じ、夢のなかになさまよい歩くような身振りで、部屋の真中まで大胆に歩き出すのをありありと見ては、もはやどうしても疑うすべもなかつたのである。

私は慄えもしなかつた。——身動きもしなかつた——その姿が持つところの風情、威容、ものごしに結びついて起る数かぎりない幻想の群れが、奔流のように私の頭になだれこんできて、私を茫然とさせ、石のように冷却させてしまつ

たからである。私は身動きもせず、ただこの物の怪をみつめる。心のなかに狂おしいまでに騒ぎ立ち——それを鎮める力もない。いま前に立つものは、生き身のロウィーナであるというのか。ほんとうに、あの髪の色は明るく眼の色の碧い、トレメインのロウィーナ・トレヴェニオン姫にちがいないというのか。——どうして、どうしてそれを疑うことができるか。口のまわりには、死の巻布が重々と垂れ下つている——だが、それは生きて呼吸するトレメインの姫の口ではないか。それから頬、——青春のま盛りのところのように燃える薔薇色、——それはまさに、生命にあふれたトレメインの姫の匂やかな頬ではないか。それから、健やかなおりのままたくほを浮べた顎のあたり、それも彼女のものではないか。——しかしそれでは彼女が病いの床に臥してからののかた身の丈が伸びたのであるか。そう考へたとき私をとらえた狂気は言ひあらわしようもなかつた。ひと飛びに私はその足元に駆けよる！すると彼女は、私の身をおわしながら、その頭部を巻きすくめていた不気味な死の装束をはらはらとほどいていったと思ふその時に、ぞよめくこの室の空気のうちに流れ出てきたのは、長々とみだれた髪、ゆたかな房の浪であつた。闇夜の大鴉の羽根よりも黒い髪であつた。それから、わがまえに立つそのものの眼はゆるやかにみひらいていった。「ああいまでも、とうとう」私ははげしく叫んだ。「もう、どうあつても、まぢがうことはない——



「これこそ、円に、黒々と、もの狂おしくかがやく——あの喪われた恋人——姫——リジイア姫の眼だ」

原題  
LIGEIA

優越者の宿命

私は時々、智力において、他の人類よりずっと優れた人間がいたとしたら、どうなるだろうと考えることがある。彼はもちろん自分の頭が、他のものよりも優れているのを知っているだろう、そして、もし彼が他の点では、普通の人間と同じであれば、彼はその優れていると知っているのを示さないではないだろうか。それで、彼はいたるところに敵を作るだろうし、また、彼の意見や考察は、もちろん他の全人類のと異っていることだろうから、彼が気違い扱いにされることも明瞭である。これは何という悲惨なことだ！ 非常に優れているために非常に劣っているとされる、これよりもひどい苦痛は地獄にもないだろう。

それと同じように、他のものはただ口だけで言っていることを自分は心から感じる、非常に寛仁な人物があったとしたら、彼はやはりどこに行っても誤解され、何をやるにしても、その誠意は疑われるだろう。ちょうど極度の智力が低能と思われるように、過度の気高さもひどい卑しさと間違えられるだろう、——そしてこれは、智力とか寛仁のみならず、他のすべての美質においても同じことである。この問題を追究するのは恐ろしいことだ。そのように他の人間を超越したものがいたことは、ほとんど疑う余地がない。しかし、その人たちの存在の跡を歴史に徴して見る場合、われわれは「偉人及び善人」の伝記をことごとく看過し、牢獄、あるいは気違い病院、あるいは絞首台の上で命を失ったものの、微々たる記録を念入りに調べてみなければならぬ。

(「マルシナリア」より)

「私の心を発く」

全人類の思想、定見、愛情を一挙にして改変しようという野心のあるものは、——容易くそれを実行して、名を不朽に留めることができる。彼はただ、ある一冊の小さな本を著わせばいいのである。その題は簡単なものであって、「私の心を発く」というのである。しかし、この本はその題どおりでなければならぬ。

著名なることを何よりも欲する人たちがじつに多く、また多くの人たちは、死後自分のことをどう思われようと少しもかまわないのにかかわらず、この本を書くだけの勇氣のあるものが一人もないというのは、何と不思議なことではないか。この本を書くだけの勇氣である。一度書かれてしまえば、それが自分の生存中に出版されることを少しも氣にかげず、死後出版されるのがどうして悪いのか、その理由を想像することさえできないものは、いくらだっている。しかしそれを書くこと、——それが問題なのである。それを書くだけの勇氣があるものはけっしてない。書くだけの勇氣があったとしても、それを書くことはできない。書こうとしてみるがいい、紙は灼熱したペンに触れて、燃えあがってしまうだろう。

(同上より)

訳注。原題は My Heart Laid Bare。ケルールの覚書の題、Mon coeur mis à nu (赤裸の心)と同じ。